金沢歴史遺産探訪月間 2026

百姓ノ持タル国
ここに始まる

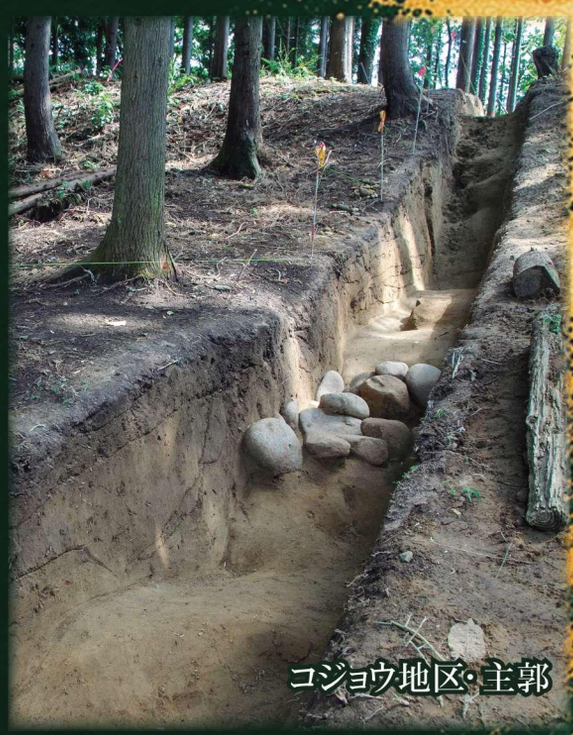
高尾城にはじまる
加賀一向一揆の
実像に迫る

高尾城跡

市史跡指定記念シンポジウム

当日資料


コジョウ地区・東外堀切


コジョウ地区・主郭

令和8年11月22日（日） 13:30～16:00

金沢市

◇プログラム

基調講演「加賀一向一揆と高尾城合戦」

（13:35－14:25）

講師　東四柳　史明 氏（金沢学院大学名誉教授）

報　告「高尾城跡の調査成果」　（14:25－14:40）

報告者　庄田　知充（金沢市埋蔵文化財センター）

～　休憩（15 分間）～

パネルディスカッション「加賀一向一揆のはじまりから終焉まで」

（14:55－15:55）

パネリスト　東四柳 史明 氏（金沢学院大学名誉教授）
パネリスト　田 村 昌 宏 氏（野々市市教育委員会教育部長）
パネリスト　中 江 隆 英 氏（白山市観光スポーツ部文化課主事）
パネリスト　大 楠 晋 也 氏（南砺市生涯学習・文化振興課主任）
パネリスト　庄 田 知 充　（金沢市埋蔵文化財センター）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　向 井 裕 知　（金沢市埋蔵文化財センター）

司　会　　冨　優香子（城郭愛好家・フリーアナウンサー）

◇講師のご紹介

東四柳 史明 氏

昭和２３年　石川県穴水町生まれ。

國學院大学院院修了後、石川県教育委員会文化財保護課、石川県立図書館史料編さん室などを経て、現在、金沢学院大学名誉教授および石川県七尾美術館館長。

専門は北陸中世史で、『加能史料』や『金沢市史』等、県内外の数多くの市町村史編さんや古文書調査に関わり、北陸地方の地域史研究に造詣が深い。

◇パネリストのご紹介

田村 昌宏 氏

昭和４２年　石川県生まれ。

奈良大学卒業後、野々市町役場（現野々市市役所）へ入庁、文化財担当に 28 年在籍（石川県埋蔵文化財センター出向６年）し、現在、野々市市教育委員会教育部長。

研究テーマは中世城館で、富樫館跡や押野タチナカ遺跡（押野館跡）の調査を担当。

中江 隆英 氏

平成９年　石川県白山市生まれ。

奈良大学大学院博士前期課程修了後、白山市役所へ入庁、文化財担当在籍５年目。

研究テーマは北陸南西部における古墳出現期の土器の様相。

白山市宮永遺跡、柴木遺跡、八田中遺跡、白山町遺跡等の調査に関わり、現在は、国史跡鳥越城跡の災害復旧及び保存活用計画の作成に従事している。

大楠 晋也 氏

平成４年　富山県生まれ。

北海道大学大学院修了後、南砺市役所へ入庁、文化財担当在籍２年目。

研究テーマは戦国時代の瑞泉寺による地域支配で井波城（瑞泉寺）の調査等を担当。

基調講演「加賀一向一揆と高尾城合戦」

講師　東四柳　史明 氏（金沢学院大学名誉教授）

「加賀一向一揆と高尾城合戦」

東四柳史明

長享二年（一四八八）六月

九日　これより先、加賀国の一向一揆等蜂起して、同国守護富樫政親を高尾城に攻める。幕府、越前国の朝倉貞景に、政親への合力を命ずる。この日、高尾城陥落し、政親自刃する。

(1)〔蔭涼軒日録〕　長享二年五月二十六日条・六月九日条・二十二日条・二十五日条

土一揆蜂起

廿六日、不參、天快晴、（中略）賀州土一揆蜂起、相圍富樫介城、以故朝倉合力之事、

政親生害の風聞集証に達す

自江州御所被仰付、

一九日、不參、天快晴、（中略）賀州富樫城被攻落、富樫介生害之由有風聞、

廿二日、不參、天快晴、（中略）叔和西堂自越前歸洛、來于當軒云、自越前之合力勢亦

政親の一党悉く生害す

無其曲、賀州富樫介之城被追落、介一黨盡生害云々、（下略）

越前勢合力のため加賀に赴く一揆衆二十万人富樫一家の者一人を取立つ

廿五日、不參、天快晴、（中略）今晨於香嚴院叔和西堂語云、今月五日行越前府中、其以前越前合力勢赴賀州、雖然一揆衆二十萬人取回富樫城、以故同九日被攻落城、皆生害、而富樫一家者一人取立之、（下略）

加賀國一揆に能登・越中の一揆も加わり数万人に及ぶ

(2)〔後法興院政家記〕　長享二年六月十五日条

十五日、丁未、晴陰、風吹、午剋以後時々小雨洒、冷泉新中納言來、傳聞、去八日於加州富樫介令生涯云々、加賀國一揆衆、其外能登・越中之一揆衆相加間、及數万人云々、

(3)〔親長卿記〕　長享二年六月二十三日条

十日に合戦との説

廿三日、終日雨下、今日人々來雜談云、富樫介於加賀國與土一揆有合戰事、已生涯云々、去比有沙汰、不請受之處實事云々、去十日合戰云々、

(4)〔大乘院日記目録〕　長享二年六月九日条

戸賀世腹切る

九日、加賀國守護戸賀世腹切、

〔北野社家引付〕　明応二年四月十一日条　○筑波大学所蔵　自未剋雨晴也、

応仁の乱以来加賀国は正体なし百姓中として上意に背き守護を生涯させる

十一日、雨降、（中略）

但天下一亂以來、取分加賀國無正躰候、結句近年守護ヲ爲百姓中背上意生涯之上者、惣而不能言語者也、（下略）　○コノ史料ノ全文ハ、戦国Ⅳ、明応二年三月二十八日条ニ掲載、

(5)〔今古独語〕

謀叛は政親が本願寺門弟の国衆を退け本家領の入手を企てたことによる

（上略）近曾長享ノ比、富樫政親謀叛ノ事モ、ソノカミ應仁一亂ノ後、加州先方衆・國人等、寺社本所領ヲ抑ヘヲキシヲ、御懇勞モタシ難キニヨリ、內々御門弟ノ衆政親ニ申ワケラレ、昔シノ如ク守護領ノ外ハ、本領ヲ諸家へ渡シ申サレシ處ヲ、又政親忠節ニヨリ、上意ヲ經テ守護職一同ニ御下知ヲ申ウケラレ、江州鉤ノ御陣ヨリ御暇ヲ申サレ、事ヲ左右ニヨセテ、本願寺門弟ノ國衆ヲシリソケ、本家領ヲヲトスヘキ企アリシユヘナリ、此義自他申ムスビ事ヤブレシカバ、同名泰高ヲ大將トシテ、カノ被官人等ア（カタ）ラヒ、各々諸家ノ申狀ヲ立侍リヌ、初ハ越前・越中諸侍モ心ヲ合セシ輩モ、常德院殿（足利義尚）近

江ノ國ニテ薨御アリシ後ハ、諸家憤リ猶々サカンニシテ、遂ニ六月ノ比高尾ノ城ニテハ（長享二年）（石川郡）
テ給ヒヌ、（下略）

守護富樫泰高は百姓が取立てる

近年は百姓の持たる国のように成行き候

(6)〔天正三年記〕 安芸法眼事

一、其後加州ニ又富樫次郎政親、イトコノ富樫安高ト云ヲ取立テ、（泰、以下同ジ）百姓中合戰シ、利運ニシテ次郎政親ヲ討取リ、安高ヲ守護トシテヨリ、百姓取立ノ富樫ニテ候間、百姓等ノウテツヨク成テ、近年ハ百姓ノ持タル國ノヤウニ成行サフラフ事ニテ候、（下略）

(7)〔官地論〕 ○石川県立図書館所蔵

一揆須崎慶覚・河合宣久を大将として上久安に俄に要害を構える

泰高二千余騎を率いて大乗寺に陣を取る

㋑ 一揆者構要害事付佛法怨敵物語事

カクテ郡訴不叶間、一揆ノ人々、コヽニ寄合、カシコニ聚會シテ談合シケルハ、コノマヽ優々緩々タラハ、以肉如與飢虎、運氣ヲ刎ラレンコト、時日ヲ轉ラスヘカラス、先如形城郭ヲカマヘ、一旦ノ害ヲ遁レテ日數ヲ經ルホトナラハ、君ノ御意モ如何アランズランヤト、須崎和泉入道慶覺・河合藤左衛門尉宣久ヲ大將トシテ、上久安ト云トコロニ俄ニ要害ヲソ構ヘケル、（中略）（久安ノ）（石川郡）

先ツ政親ノ祖父富樫ノ泰高ヲ當國ノ守護職ト仰キ奉ノ間、家ノ子・郎等ヲ引卒シ、（東大本「家子・郎等・古老ノ者トモ付したかう」トアリ、）都合其勢二千餘騎、（万、東大本、野市大乗寺ニ陣ヲトル、）（石川郡）

㋺ 一揆諸勢打立事

金剣・白山宮衆徒僉議し一揆に合力することを決す

四箇寺ノ大坊主ハ各一味同心シテ、剃除鬚髪ノ頂ニハ、金剛堅固ノ甲ヲ戴キ、解脱幢相ノ法衣ヲ脱キ置キ、衆怨悉退ノ鎧ヲ著、惡魔降伏ノ刀劔ヲ腰ニサシ、魔障退散ノ弓箭ヲ負ヒ、同宿・若黨ヲ引卒シテ都合其勢四万餘騎、伏見・山科・淺野・大衆免、所々ニ陣ヲトル、劔・白山兩山ノ衆徒宣議シケルハ、國内ノ一大事コレニ過ヘカラス、一國破レ家亡ヒナハ、兩社トテモ安穩ニ有ヘカラス、民ハ根、君ハ葉ナレハ、根ノ民ニ合力セヨトテ、其勢三千餘騎、（二イ）諏訪口ヘ打出ツ、洲崎和泉入道慶覺・同十郎左衛門尉久吉（真名本、東大本、久吉以下十七字ナシ、「同重郎左衛門尉正末」トスル、）・河合藤左衛門尉宣久・石黒孫左衛門正末ラヲ大將トシテ一万餘人、外張ヘ打出テ上久安ニ陣ヲ取ル、笠間兵衛家次鞹ノ衆七千餘人ヲ引具シテ、野市馬市ニ陣ヲトル、安吉源左衛門尉家長河原衆八千餘人ヲ引偈、額口ニ陣ヲ取ル、山本圓正入道祐賢同輩十人ト與シテ、其手一万餘人、山科山王林ニ陣ヲトル、高橋新左衛門信重六个ノ軍兵五千餘騎ヲ將ヒテ、押野山王林ニ陣ヲトル、山八人衆・四山・々ノ内ノ諸勢、都合山々峯々ニ洗間モナク扣ヘタリ、其外能美郡ノ軍旅ハ五万餘人、野市諏訪ノ森ニ陣ヲトル、

政親腹を切る

千代松丸屋形に火を懸ける

泰高政親の首を見る

㋩ 高尾城落事付政親自害事

其後政親急キ追付ント仰ケレハ、千代松丸九寸五分ノ鎧徹ヲ、檀紙ヲ以テ中程マテ吉利々々ト卷テ進ラセ、甲斐々々シクモ械錫申シケリ、政親刀ヲ取リ十文字ニ腹切、返取刀ニテ水走ニ突立テ、臍ノ下ヘ活ト推下シ、緋ノ血刀ヲ持テ、

五蘊モト空ナリケレハ何モノカ借テ來ヌラン借テ歸サン

トアソハサレ、刀ノ切先ヲ口ニ含ミ臥迂給ヘハ、欄口マテ連カレテ失給ヒケリ、千代松丸御死骸ヲ取認、屋形々々ニ火ヲカケ、猛火ノ中ヘ走入リテソ御供申ケル、若輩ナカラ頼モシヤト譽ヌ人コソナカリケレ、一業所感ノ趣、自業自得ノ道理ト云ナカラ、當來ノ苦報思ヤラレテ哀ナリ、諸勢亂入シテ、政親ノ御首ヲ取、大將ナレハ泰高ノ御目ニ懸奉リケレハ、唯一目御覽シテ菟角物ヲモ宣ハス、

報　告「高尾城跡の調査成果」

報告者　庄田　知充（金沢市埋蔵文化財センター）

高尾城跡の調査成果

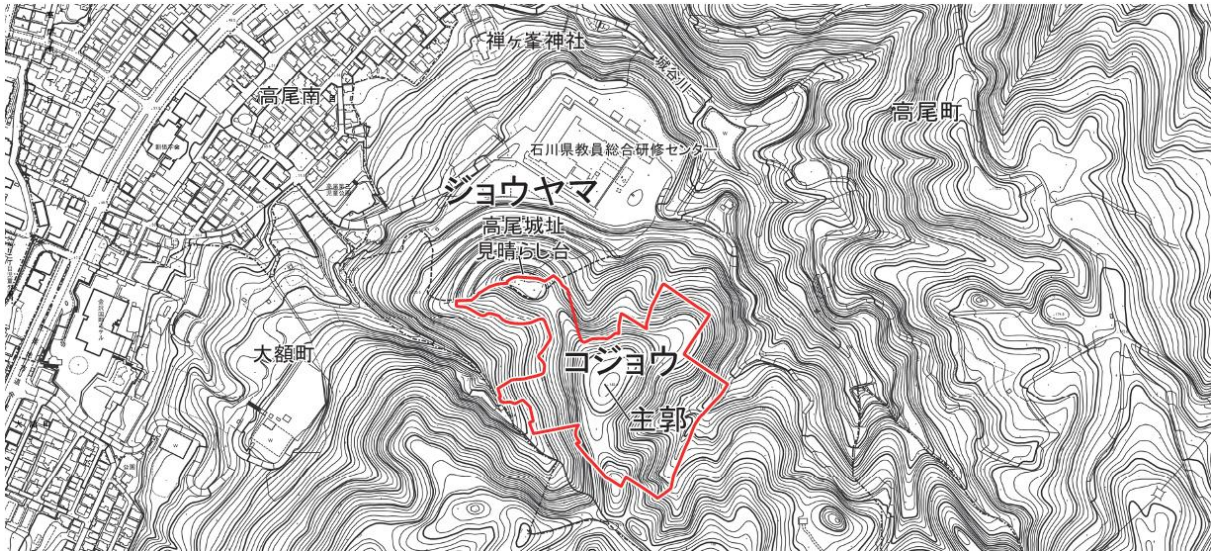
１．調査概要

高尾城は標高約 186m の富樫丘陵先端部一帯に築かれた山城です。浄土真宗門徒による長享2年(1488)の一向一揆の際、攻められた加賀国守護・富樫政親がこの城に立てこもって敗れたことにより、加賀が「百姓ノ持チタル国ノヤ(ヨ)ウ」となる歴史的事件の発端となったことで広く知られています。信仰をよりどころとした民衆による自治はその後約 100 年間続きました。

城跡は「ジョウヤマ」と「コジョウ」と呼ばれる地区にあります。「ジョウヤマ」地区にあった城の主要部分は過去の土取りにより失われ、一部が高尾城址見晴らし台として残るのみですが、「ジョウヤマ」の背後にあって尾根道で結ばれている「コジョウ」地区には主郭や曲輪、堀切など城郭遺構が残されています。

金沢市では令和4～5年度にかけて、「コジョウ」地区に残る遺構について測量調査や発掘調査を実施し、高尾城跡の歴史的変遷を探りました。

令和4年度　航空レーザー測量　　→城郭遺構の分布状況を立体的に視覚化し、平面図を作成
令和5年度　発掘調査(4箇所計約 50 ㎡)　→山城として機能していた当時の形状や規模を把握
→出土品から山城の年代を特定
主な遺構　堀切、切岸、主郭、曲輪(平坦面)、集石遺構、炭化物層
主な遺物　渡来銭(熙寧元宝)、土師器皿、珠洲焼すり鉢、古瀬戸平碗



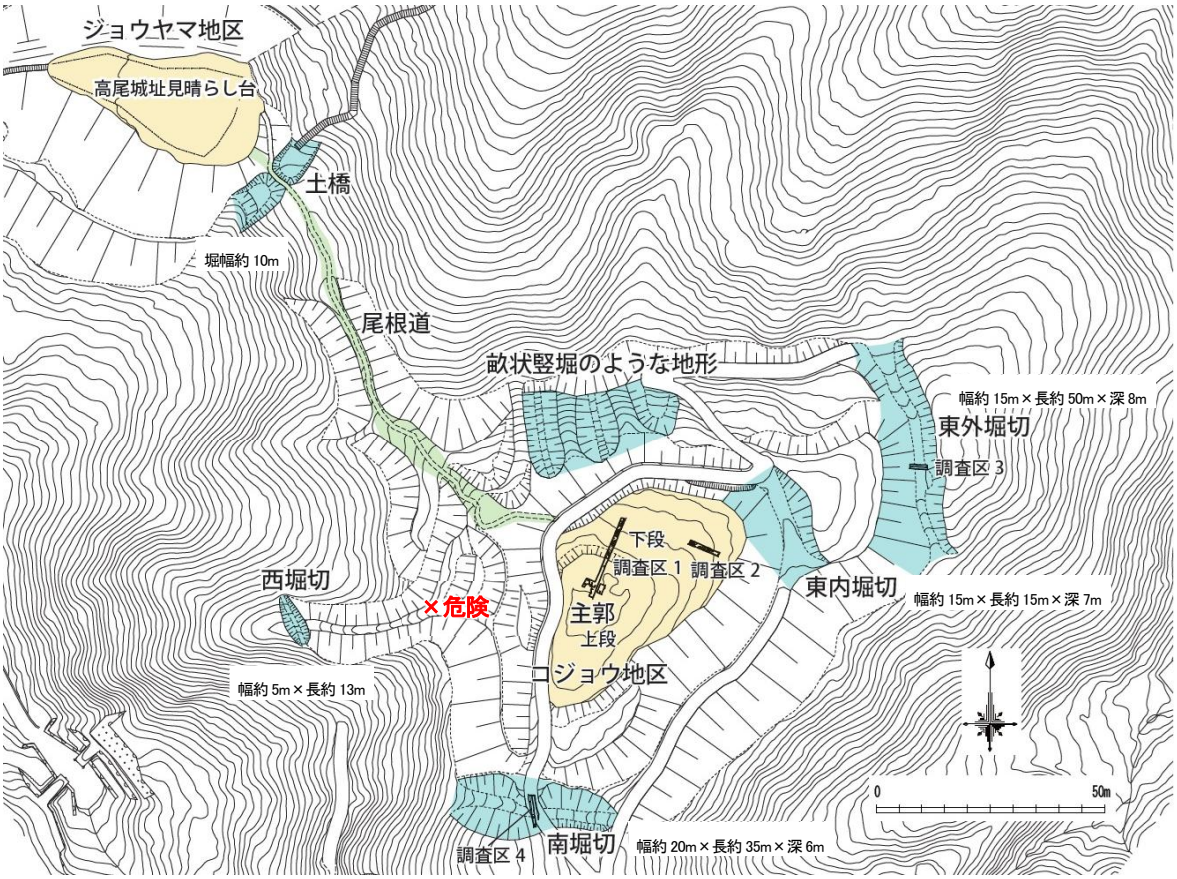
市史跡 高尾城跡の位置

【用語解説】

曲輪(くるわ)　尾根や斜面を造成した平坦面で、土塁・切岸・堀などで区画された区域
主郭(しゅかく)　城の中で中心になる曲輪で、近世城郭の本丸にあたるところ
堀切(ほりきり)　尾根を伝って進入する敵を防ぐため、尾根を断ち切り空堀としたもの
切岸(きりぎし)　斜面下からの敵の侵入を防ぐため、斜面を削って急傾斜の断崖としたもの
土橋(どばし)　堀を掘る際に一部だけ掘り残して通行できるようにしたもの
竪堀(たてぼり)　斜面に対して縦方向に溝状の堀を設け、敵の横移動を防いだもの

２．市史跡 高尾城跡の遺構と発掘調査位置

コジョウ地区では主郭、4箇所の堀切、連続する畝状竪堀のような地形等が知られています。発掘調査は主郭に2箇所と東外堀切・南堀切に各1箇所、計4箇所で実施しました。



市史跡 高尾城跡の遺構と調査位置

３．調査成果

◆主郭（調査区１・２）

概要　主郭は標高約 186m の小高い丘陵を頂点とするコジョウ地区の最高所で、頂上付近には約 500㎡の平坦面(主郭上段)が広がっています。主郭の北東側および南東側では、一段下がった位置で標高 180m 付近まで緩やかな斜面(主郭下段)が続きます。主郭北西部の上段から下段にかけて調査区1を設定したところ、上段の地表下約 20cm で中国製の渡来銭「熙寧元寶」が出土しました。「熙寧元寶」は 1068 年初鋳の北宋銭です。中国の貨幣は貿易により輸入され、渡来銭として日本国内で広く流通していました。主郭上段では地質が硬化する地表下約 40cm まで掘り下げたところ、上面が平坦な石が検出されました。しかし、周囲からはこの石と並んで建物跡を示す石は確認されませんでした。主郭上段から主郭下段にかけては、現在、比高差約3mの緩斜面となっていますが、発掘調査により上段と下段の間は比高差約 2.2m、最大斜度約 55～60 度の切岸となっていること、下段は高低差約 50cm の二段の平坦面で構成されていることが判明しました。また、下段平坦面のくぼ地には人頭大の川原石が多数集積されていました。周囲から出土した土師器皿や古瀬戸碗の年代により、14 世紀後半～15 世紀前半代の遺構であると考えられます。

集石より上層では 14 世紀末～15 世紀後半代の珠洲焼のすり鉢や、細片ながら 15 世紀後半～16 世紀代と考えられる土師器皿も見つかりました。

主郭下段の調査区2では、斜面に盛土して平坦面を造成していることが確認されました。

◆東外堀切（調査区3）

概要　高尾城跡東面を流れる城谷川から主郭へ登る稜線を断ち切るように掘られた南北方向の2本の堀切(東外堀切・東内堀切)のうち、東外堀切は幅約 15m、長さ約 50m、深さ約8mを測り、コジョウ地区で最も大規模な堀切です。東外堀切の底を掘削したところ（調査区3）、堀底は平坦で堀底幅は約2.7mとなっており、現在まで堀底に 1.8mの土砂が堆積していることが判明しました。堀切の外側では固い砂層を約 50 度の傾斜で削り出した切岸の斜面となっていることを確認しました。

◆東内堀切

概要　東方稜線を遮断する2本の堀切のうち、主郭側の堀切で、幅約 15m、長さ約 25m、現況深さ約 7mを測ります。発掘調査は実施していませんが、東外堀切同様、堀底は深さ約 1m 以上土砂が堆積して埋没しているものと推測されます。

◆南堀切（調査区4）

概要　コジョウ地区の南(搦手)側稜線を断ち切るために掘られた東西方向の堀切で、幅約 20m、長さ約35m、深さ約6mを測ります。調査区4では堀切の一部が造林作業道により埋められていますが、地下遺構は良好に残っていることを確認しました。堀底の断面形状は丸く、調査区内では堀幅約5.5mまでを確認しました。表土から堀の最深部までは約 2.2mの土砂が堆積しています。なお、堀外側斜面の傾斜は約 30～55 度、堀内側斜面の傾斜は最大約 20 度でした。

◆西堀切

概要　西方の大額側からコジョウ地区主郭へ至る細尾根に設けられた北西−南東方向の堀切で幅約5m、長さ約 13mを測ります。急峻な稜線上にあるため詳細な調査は実施していません。

◆尾根道と土橋（竪堀・ジョウヤマ地区）

概要　ジョウヤマ地区とコジョウ地区は幅約 1m、長さ約 100m の尾根道で連絡しています。尾根道は見晴らし台直下で両脇に幅約 10m の竪堀をもうけて稜線をせばめ、土橋としています。発掘調査は実施していません。

4．調査成果

① 高尾城（コジョウ地区）には、主郭、曲輪（平坦地）、切岸、大規模な堀切等が良好に残されており、高尾城のジョウヤマ地区と密接な関係を持つ城郭遺構であることを確認できました。

② 発掘調査を行って出土品を確認したことにより、富樫氏治世の 14 世紀後半～15 世紀代を中心とした時期にはじまる城郭遺構であることが明らかになりました。

③ 少数の細片ですが、15 世紀後半～16 世紀代と考えられる遺物も出土したことから、高尾城が落城した長享2年（1488）の一向一揆の際にもコジョウ地区が山城として利用された可能性あります。

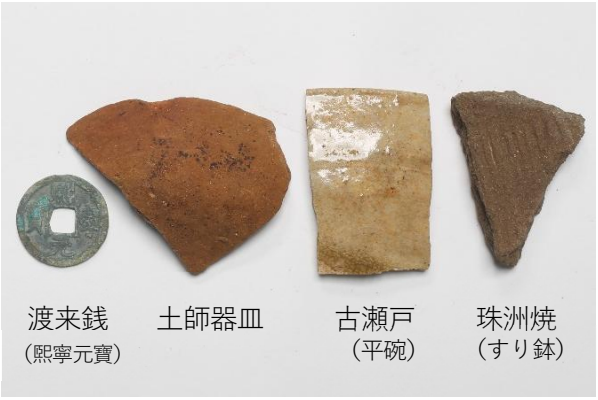
④ 主郭北側にみられる畝状竪堀のような地形は、16世紀後半の一向一揆軍による改変の可能性を示唆するものですが、今回の発掘調査では同時期の遺物が確認されませんでした。

5．高尾城跡の市史跡指定

金沢市では、令和8年9月11日付けで高尾城跡（約 44,552 ㎡）を市史跡として指定しました。



主郭上段（調査区１）の平坦面



主郭（調査区１）出土遺物



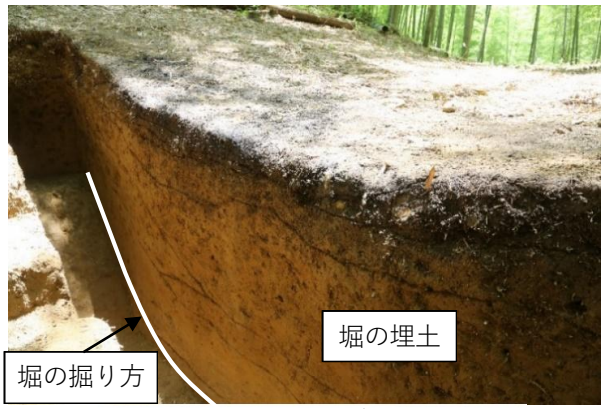
主郭下段は二段の平坦面で構成される



主郭下段のくぼ地に人頭大の川原石を集積



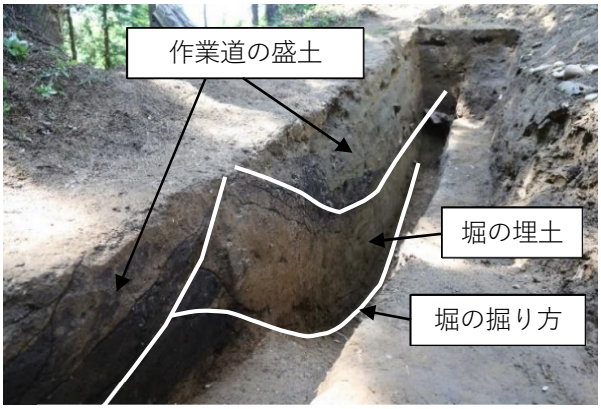
東外堀切（調査区３）現地表下約 1.8m 埋まる



東外堀切 埋土はほぼ均質な山砂



南堀切（調査区４）旧地表下約 1.2m 埋まる



南堀切（調査区４） 土層堆積状況

6．高尾城主・富樫氏の歴史について

富樫氏は、平安時代の代表的な武人として知られる**藤原利仁**（としひと）の流れをくむ加賀斎藤氏の一族で、野々市市と金沢市を流れる高橋川中流域の**富樫郷**を拠点としていました。

藤原利仁から7代目の**家国**（いえくに）がはじめて「**富樫介**（とがしのすけ）」を称し（富樫氏の始まり）ました。

加賀地域で勢力をもっていた林氏が、承久 3 年(1221)の**「承久の乱」**で朝廷方について衰退したことにより**幕府方の富樫氏が加賀武士団の筆頭**となりました。これ以後、守護を歴任する北条氏一門の代官を富樫氏が務めることになりました。

富樫高家（たかいえ）は南北朝内乱期の戦功から、建武 2 年(1335)加賀国の**守護**に任じられ、守護所を野々市に置きました（**富樫館**）。

嘉吉元年(1441)、**富樫教家**（のりいえ）が将軍の怒りに触れて失脚したことを発端に富樫氏の分裂が始まりました。

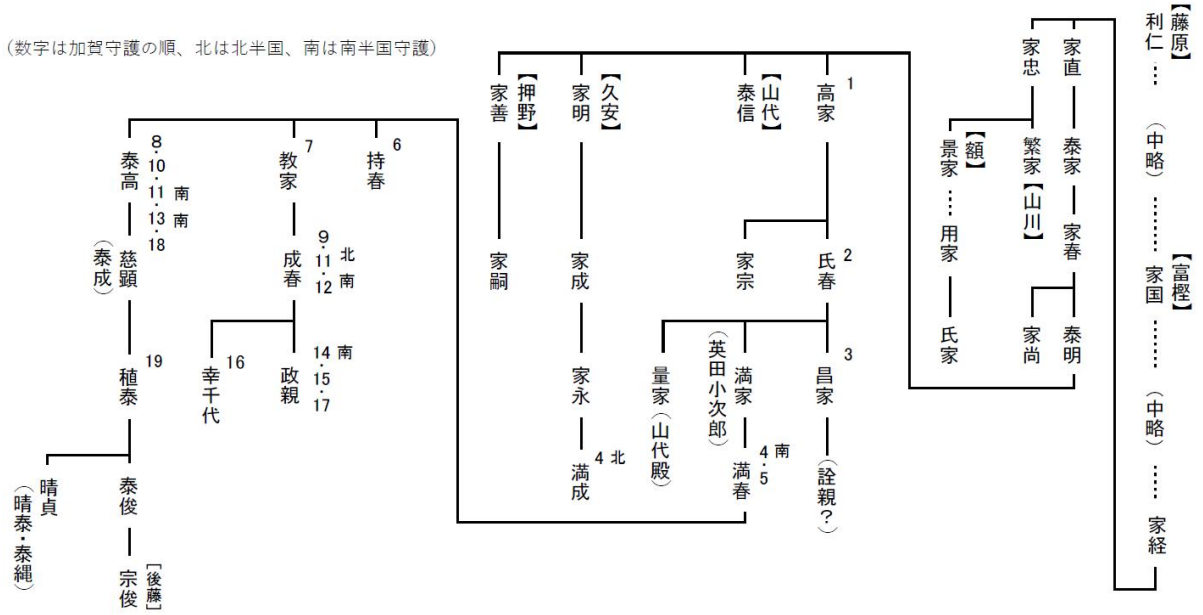
応仁・文明の乱(1467～77)に際し、西軍についた弟**幸千代**に対し**富樫政親**（まさちか）は東軍につき、本願寺の助力を得て守護となる。戦後は一向宗を弾圧。

長享 2 年(1488)、**加賀の一向宗門徒**と一族の富樫泰高（やすたか）の攻撃により、守護**富樫政親**が敗北し、籠城した**高尾城**も落城しました。

戦国期には、**富樫泰高**とその子孫が加賀国の守護職を引き継ぐものの、実権は一向宗門徒がもち、富樫氏の勢力は衰えていきました。

元亀元年(1570)、室町将軍足利義昭の加賀の賊討伐の上意を受け、織田信長に呼応した守護**富樫晴貞**（はるさだ）は、金沢市の伝燈寺で一向宗門徒に討たれ、富樫氏は滅亡しました。

> 【承久の乱】　後鳥羽上皇が鎌倉幕府の執権である北条義時に対して起こした、朝廷と鎌倉幕府との間の対立抗争のことです。上皇は敗北し隠岐に流されました。



富樫氏略系図

年号（西暦）	富樫氏に関係する主な出来事	日本史の主な出来事
延喜15年（915）	富樫氏と林氏の祖先である藤原利仁、鎮守府将軍に着任	
康平６年（1063）	富樫家国、野々市に館と神社（現在の布市神社）を建立 「富樫介」を名のり天皇家や公家の警護として仕える	
治承４年（1180）		源頼朝・木曽義仲、平氏追討のため挙兵 （治承・寿永の乱）
寿永２年（1183）	富樫家経、北陸道を南下する木曽義仲の軍に加わり、倶利伽羅峠で平氏軍を撃破	倶利伽羅峠の戦い
寿永３年（1184）	富樫家経、木曽義仲に従い京へ行くが、源義経に敗れ加賀に戻る	
文治３年（1187）	源義経一行、京から奥州へ逃れる途中、弁慶が富樫の館に立ち寄ると伝わる	源義経、兄頼朝によって京を追われる
建久３年（1192）		源頼朝、鎌倉幕府を開く
承久３年（1221）	上皇方の林氏が衰退、幕府方の富樫氏は勢力拡大 富樫氏、京の治安維持に活躍	鳥羽上皇、鎌倉幕府追討のため挙兵 （承久の乱）
永仁元年（1293）	富樫家尚、永平寺（福井県）から徹通義介を招き、野々市（本町一丁目付近）に大乗寺を開く（加賀で最初の禅寺）	
元応２年（1320）	富樫泰明、加賀守護の代理として白山本宮を参拝	
元弘３年（1333）		鎌倉幕府が滅亡
建武元年（1334）		後醍醐天皇、建武の新政を開始
建武２年（1335）	足利尊氏、富樫高家を加賀の守護に任命（富樫氏最初の守護）	足利尊氏、武家政治を行うため挙兵したが、九州へ敗走
建武３年（1336）	富樫高家、九州筑紫多々良浜の戦いで勇敢に戦った尊氏七騎の一人と伝わる	足利尊氏、多々良浜（福岡市）の戦いに勝利
暦応元年（1338）	富樫高家、尊氏の側近として室町幕府の誕生に尽力	足利尊氏、室町幕府を開く
貞和元年（1345）	足利尊氏、富樫氏春（高家の子）を富樫新庄（野々市市新庄付近）の地頭に任命	
貞和２年（1346）	富樫家善（押野殿）、大乗寺に押野荘の土地を寄進	
観応元年（1350）	富樫高泰、富樫氏出身の大乗寺第三代明峰素哲の供養のため、大乗寺に高安軒（野々市市本町１丁目付近）を建立	
応安２年（1369）	富樫昌家（氏春の子、北朝方）、越中（富山県）の桃井勢（南朝方）と野々市で撃退	
至徳４年（1387）	富樫昌家没。斯波義種が加賀守護に任命され、この後27年間支配	
明徳３年（1392）		南北朝合一
応永21年（1414）	富樫満春と富樫満成、斯波義種の失脚により半国ずつの守護に任命	
嘉吉元年（1441）	富樫教家（満春の子）、将軍足利義教の怒りにふれ、弟の泰高が守護に 将軍義教の死で、教家と泰高兄弟による守護をめぐり争う（富樫一族内紛）	赤松満祐、将軍足利義教を殺害（嘉吉の乱）
嘉吉２年（1442）	管領畠山持国、富樫成春を守護にして父の教家を復権させたが、守護であった富樫泰高が抵抗し、翌年に争いが起こる	
文安２年（1445）	管領細川勝元が富樫泰高を守護に復帰させたが、再び富樫一族が争ったため、勝元、富樫成春（北加賀半国）と泰高（南加賀半国）を半国守護とすることで争いを収める	
長禄２年（1458）	赤松氏、神璽（天皇の印）を奪回した功績によって北加賀半国の守護に 富樫教家・泰高、協力して赤松氏に抵抗し北加賀の各地で争いを起こす	
長禄４年（1460）	富樫泰高、南加賀半国の守護を富樫成春に譲るが、成春の死により３年後に復帰	
寛正５年（1464）	富樫泰高、隠居して富樫政親に南加賀半国の守護を譲る	
寛正６年（1465）	将軍足利義政、後花園天皇の仙洞御所で花見の宴を行い、この時新作の能『安宅』が上演されて安宅の関に「富樫」が登場	
応仁元年（1467）	富樫政親、大乱当初は西軍（山名方）であったが、将軍義政の勧めで東軍（細川方）に加勢	応仁・文明の大乱（1467～77）
応仁２年（1468）	富樫政親、赤松氏が播磨の領地（兵庫県）を取り戻して帰ると、加賀一国の守護に	
文明３年（1471）	富樫政親、弟幸千代と対立。越前の朝倉孝景により幸千代が加賀守護に 蓮如が吉崎御坊（福井県）を開き、北陸に浄土真宗の教えを広める	
文明６年（1474）	富樫政親（本願寺派）と弟幸千代（高田専修寺派）が争う（文明の一揆） 政親、勝利して守護に復帰するが、本願寺派は大きな力を持つ	
文明７年（1475）	本願寺派の一部、富樫政親と争いを起こしたため責任を取り蓮如は吉崎を退去	
長享２年（1488）	富樫政親、将軍足利義尚の近江六角氏討伐に出陣したが、兵糧米や兵を国に求めたことで、加賀で大規模な一揆が起こる 政親、高尾城に立てこもるが、富樫泰高が総大将の一揆方の攻撃を受けて、自害（長享の一揆） 泰高、政親の葬儀を大乗寺で行い、翌年、守護に	長享の一揆
享禄４年（1531）	富樫稙泰（泰高の孫）、本願寺派の内乱から起こった争い（享禄の錯乱・大小一揆）に敗れ越前に逃走	
元亀元年（1570）	富樫晴貞（稙泰の次子）、将軍足利義昭の命により織田信長に加勢したため一揆方から攻撃。晴貞と子の祖雲和尚は伝燈寺（金沢市）で討死 晴友（晴貞長子）、越中小杉（富山県）に逃れ小杉と名を改め、後に前田利長に仕える	織田信長、本願寺（一向一揆）と10年に及ぶ戦い（石山合戦）を始める
天正２年（1574）	富樫泰俊（稙泰の長氏）、子の稙春・天易侍者が越前で加賀一向一揆方と戦い、金津城で自害。宗俊（泰俊の三子）、越前から逃れ、後藤弥右衛門と名を改め押野に居住	
天正８年（1580）		織田信長軍、一向一揆勢を撃破

富樫氏略年表　（富樫氏頌徳会2016『八曜の剣　加賀・富樫氏の物語』より抜粋）